

## 郡上藩医学校の於東京医学修行生徒達

森永 正文

(医)成医会 もりなが耳鼻咽喉科

今をさかのぼること150年前、遠く故郷を離れ東京の地で医学に志ざし勉勵の、4人の郡上藩の若者達がいた。明治4年2月のことである。郡上藩での医学教育の歴史は意外と古く、1790年代前半には藩校に医学講座が、慶応4年6月に正科となり、さらに明治3年6月に種痘・施療の臨床を行う「医学所」が藩校別館として設けられた。これは、のちに「医学寮」について「医学校」と改称された。

同4年7月の廃藩置県により郡上藩は郡上県に、12月には新置岐阜県に吸収され廃県となった。この際、郡上県から岐阜県へ事務引き継ぎのための多数の文書が申し送られている。この一つに「元郡上県学校諸費調書」がある。明治3年10月より翌年9月までの一年間の郡上県学校の諸経費についての調査書である。この「調書」には東京遊学生として「貢進生」毛受真一郎、「於東京医学修行生徒」林元策・小野三禎・長嶋隆安の名が記されている。いずれも郡上藩医の子弟である。開設後間もない医学校の教育レベル、治療水準向上を目的として最新の西洋医学を学ばせるため派遣されたものである。

郡上県学校(郡上藩学校)は文学(=文校、洋学・漢学など5科)と武学(=武校、練兵・撃剣など4科)から構成され、これ以外に文学管轄の医学校があった。「於東京洋学修行生徒」1名を含めた洋学医学修行生徒手宛金は金70両、貢進生渡諸費は金142両永625文、計5人の遊学費は県学校年間支出(米65石5斗7升金1035両永848文2分1厘)のおよそ20%を占める。なお、修行生徒への1ヶ月手宛金は一律金2両2分、貢進生費用内訳は東京出府諸費の金23両永375文、大学南校入寮時必要費・書物料の金11両永250文、月俸諸費の金108両(1ヶ月につき月俸4両+諸費5両=9両)。貢進生派遣は藩にとっては負担の重い制度である。

貢進生の遊学先は大学南校であり、医学修行生徒は東校と考えられる。東校には正則生・変則生の二生があり、また明治2年9月「太政官御沙汰書」により30歳未満の「三典鑿」「御鑿」は大学校での医学研修が命じられており(今般三典鑿之外御鑿之輩三十歳以下ハ鑿学修行 被仰付總テ大学校附属被仰付候事)、現役の郡上藩医である林元策は変則生として入学出府したのではないかと推察される。

維新期の東京医学生4名のほか、郡上藩では数々の他国医学修行がみられる。青山藩時代(1759~1871)にかぎっていえば、湊宗有の1763年の京都・伊良子塾(カスバル流外科の流れをくむ)入門が最古であり、1781年幕府法印池原長仙院入門の林雲策、1865年4月より幕府西洋医学所に学んだ中泉松庵などがある。この他、「青山家家臣由緒書」には9名の医学修行・遊学者が散見される。遊学生に対し藩からは遊学費、加増などの報賞、地位の格上げ(奥医師など)の種々の恩典も多うかがえる。

時代は下るが、明治32年1月、青雲の志を抱き修学のため上京した郡上地方出身の青年達に学資を給与・貸与し、学生寄宿舍(小石川区戸崎町)に収容し、当該地方の人材を育成するという「郡上青年会」が発足した。在京の旧郡上藩士族を中心に旧藩主令息を会長に、郡上藩元遊学生中泉正(松庵)氏を本部長として組織されたもので、同会の郡上出身者への「於東京修行」をサポートする育英事業は、かつて郡上藩時代にみられた他国修行遊学の助成・支援制度の衣鉢を継ぐ結果の名残ともいえようか。

しかし、これら4名の若きエリート達に託された郡上医学の夢も廃藩置県によりついでた。明治に入り全国各地で拡がりを見せ始めた洋学医学教育の芽は一気に押しつぶされてしまったのである。

以上、維新期の藩費遊学生を中心に郡上藩の医学遊学事情を報告する。